

『現地を訪問して想うこと』

「匿名希望」

東日本大震災から2年8カ月、南三陸に向かうバスの中から町を見た時、言葉を失いました。瓦礫は撤去されているものの、町の建物や住宅等が何にもない更地になっています。

ただ鉄骨の枠だけ残っている建物が見えました。そこが、南三陸防災対策庁舎でした。バスを降りて、祭壇の前で黙祷をささげました。慰霊の方々の列が絶えません。最後まで津波の放送をされていた職員の方々の声が聞こえてくるようで、とても辛かったです。ここで、たくさんの尊い人々の命が奪われました。大震災にともなう大津波の被害の恐ろしさが伝わってきます。津波は、尊い人々の命、建物や住宅、何から何までも根こそぎにし、地盤沈下までおこしていました。その土地を回復するには、土地のかさ上げも行わなければならないということです。

次に訪れた南三陸プラザでは、笹かまぼこを製造されている「ささ圭」さん社長御夫妻のお話を伺いました。閑上地区にあった3か所の工場が8~9メートルの津波で流され、社員の方々を亡くされました。現地では、ライフラインが破壊され情報を全く得ることが出来なかったという大変な状況もわかりました。そんな中でも、ストックしてあった笹かまぼこを避難所に届けられたこと。そして工場を再建か、廃業かのことについて、たくさんの問題を抱えながらの苦渋に満ちたとても辛い目々を過ごされました。そのような状況の中で再建にいられたお話に、もらい泣きをしました。

翌日は、気仙沼に行きました。途中、鉄道の線路が激しく寸断された現場も目にすることが出来ました。気仙沼の港も津波の爪痕が残り更地になっていました。

それから「ささ圭」さんのお店がある「閑上さいかい市場」に行きました。御夫妻に迎えられ買い物をしました。いつまでもバスを見送っていただいた「ささ圭」さん御夫妻の顔が目に浮かびます。『頑張ってください』。

当たり前だった生活が、大津波によって一瞬にして破壊されてしまった被災地の方々は、いまだに心に大きな傷を抱えられたまま、仮設住宅等に住まわれ、職を失われています。これまでの生活を取り戻されるのがいつの日になるのか、まだまだ復興は難しく心が痛みます。被災された現地の方々から直接にお話を伺える機会を得て、貴重な体験をすることが出来ました。この実情をたくさんの方々に伝え、現地を訪ねていただくこと等を広めていかななくてはならないと思いました。そして、この被災の教訓が生かされた復興がなされなければなりません。

このツアーに参加できて本当に良かったと思います。この企画をされた校友会の事務局、復興委員会、宮城県校友会、一緒に参加された校友の方々とも知り合い、交流できる機会ともなりました。感謝いたします。